

乾先生を偲ぶ

花 田 順 信

(佛教大学社会福祉学科主任・社会学部教授)

「業の海に漂^{たふ}う死は正確にやってくる。足音もなく、姿も影もなく、ただ死を宣告するためにくる。この宣告は未だ曾って一度も訂正・却下された例はない。死は絶対平等であるから手加減しない。それゆえに人々は死を恐れ^{おそ}え悲しみの中に沈む。」と。まさに至言であるが人の死は悲しいものである。昨年八月、

池川先生の突然の急死に続いて、先生の訃報にただただ茫然、人生の無常に愕然するのみでありました。

初代佛教大学社会学部長であり、社会福祉学科の生みの親でもありました秦隆真先生が知恩院社会課長時代、華頂会館主事を勤めておられました昭和二十一年暮、松尾英俊先輩（現村瀬氏）にともなわれてお会いしましたのが最初でありました。経歴にみられるように、昭和二十四年より法務事務官として昭和五十一年

三月退官まで二十七年の長きにわたって「更生保護」に尽力されておられます。

昭和五十一年四月より、佛教社会事業研究法主事としてお勤めいただき平成元年三月退任まで十四年間、研究所の運営に、特に研究所発行の「佛教福祉」第三号より第十五号「佛教社会事業研究所年報」第一号、第二号の編集責任者としてご尽力いただきました。また、浄土宗宗務庁、総本山知恩院からの出版助成の資金援助の交渉等先生ならではの出来得ない大変なご努力をしていただきました。

また、通学、通信教育の「司法福祉論」の講座を担当していただき多くの学生に先生の多年にわたる法務官の実体験と学殖は感銘をあたえて参りました。

「司法福祉とは、広く司法場面における福祉あるい

は司法制度に関連する社会福祉的活動として、裁判所だけでなく司法判断にもとづいて行われる執行や処遇の過程をも含めたものとして捉えられる。強制力を背景とした司法と、非権力的な福祉は、一見そぐわないようであるが、決してそうではない。犯罪者処遇は再犯防止の観点から、強制力を背景にした施策に全面的に依拠するのではなく、社会復帰へ向けての犯罪者の主体的な活動を援助する措置を拡大することが必要なのである。これは、援護育成を必要とする者が、自立してその能力を発揮できるよう必要な生活指導更生補導その他援護育成をするという福祉の意味と合致するものである。

この場合、少年審判、保護処遇のみならず成人を含めての更生保護など広範囲の福祉的教育的活動を指すものと考えるべきである。」

（佛教大学通信教育「司法福祉論」リポート作成参考資料より引用。）

また、先生は生前、佛教者の少年保護に尽力された業績が今日、次第に忘れ去られようとしてことに特に

危惧され、

「非行少年の処遇については、国の刑事政策的一面と民間の社会福祉の一面とが、両々相俟って、役割を果たしてきた。特に大正十一年制定された旧少年法の実施以来、今次大戦の終戦直後の昭和二十四年新少年法が施行されるまでの間、所謂少年保護事業が、非行少年の矯正と更生のため教育と保護を行ってきたのである。

その間、民間の篤志家特に佛教者が、少年保護団体（施設）を経営して少年の收容保護に当り、或は少年保諸司を委嘱されて在宅少年の観察補導に当るなど、その業績は見るべきものがあつた。

これら佛教者の業績が、近來急激な社会の変動に伴い、次第に忘れ去られ消え去ろうとしている。

現在において、能う限り資料文献を収集借覧し、関係者の記憶や伝聞を聴取して、これらを集成し記録して、後代に遺し、先人の労苦を顕彰し、以て後輩の社会事業に対する熱意を刺戟し、奮起精進の資としなければならぬと考える。」

「少年保護事業史上の佛教者について」
(『佛教福祉』一九八八年三月第十四号)

今後、われわれ後輩は先生の遺志を継ぎ、がんばらねばならないと先生の霊前にお誓い申し上げたい。
